

1. はじめに

土木計画学の分野において、社会資本整備後の利用や維持管理を見越し、計画段階における住民の合意形成や住民参加の手法や効果を述べた研究は多くみられる。しかし既に整備済みの社会資本について、地域への定着や住民生活への浸透について積極的に述べた研究は見られない。また東日本大震災以降、社会資本整備と並行し、組織・住民間の連携を深め地域継続力の向上させる必要性が、より強く認識されるようになってきている。本研究はこうした時勢を敏速かつ的確に捉え、地域交流の活性化に向けた複数の社会資本連携について、鹿児島県伊佐市曾木の滝周辺を対象に実践的研究を行うものである。

鹿児島県伊佐市の代表的観光地、曾木の滝の周辺では近年、複数の社会資本整備が行われた。これらの事業は地域住民の安全・安心で豊かな生活環境の創出を意図して進められたにも関わらず、当該事業に対する住民の認知度は低く、当該地域を日常的に利用する住民はごく僅かである。

本研究では、既往の社会資本整備が、地域内外の交流へと展開する、直接的・波及的効果や可能性について考察を行う。また当該地域において、今後も進展する社会資本整備を見越し、社会資本の地域への定着手法を考案することにより、地域の人材育成や交流ネットワークの形成といった、継続的な地域づくりへと発展することを目的とする。

2. 研究対象地の概要

曾木の滝がある伊佐市は、鹿児島県の最北に位置し、東は宮崎県えびの市、北東は熊本県人吉市と隣接している(図-1)。同市は川内川の上流域にあたり、周囲を九州山脈に囲まれ、菱刈平野や大口盆地を有している。2008(平成 20)年 11 月に旧大口市と旧菱刈町が合併し、伊佐市となった。

曾木の滝は、「東洋のナイアガラ」と称される伊佐市の代表的な観光地である。2009(平成 21)年には「平成百景」に選ばれた。来場客数は 2000(平成 12)年には年間 50 万人であったが、現在では 30 万人に減少している。観光客の大半は、桜や紅葉の見ごろ、あるいは、もみじ祭り開催時期の利用客であり、それ以外は食事やトイレの休憩のために立ち寄り、滝を見て帰るといった通過型の観光が行われている。

曾木の滝周辺では、2011(平成 23)年 3 月に河川激甚災害対策特別緊急事業の一環として曾木の滝分水路が完成、同年 11 月には曾木の滝下流に新曾木大橋が開通した。曾木の滝公園内には、2012(平成 24)年 4 月、新たに観光拠点施設がオープンした。さらに第一曾木発電所の取水口を利用した小水力発電所は、2013(平成 25)年 4 月の稼働を目指して整備中である。

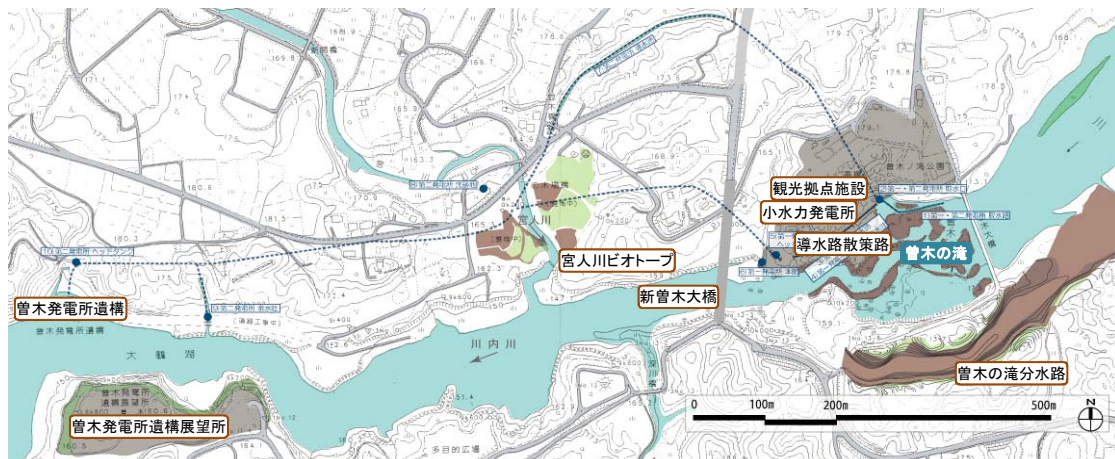


図-2 曾木の滝周辺における近年のインフラ整備

鶴田ダム湖環境整備事業では、旧曾木発電所関連施設やビオトープ施設が整備されている。曾木発電所遺構は、2004(平成 16)年から 2007(平成 19)年に、鉄骨や煉瓦によるバットレス補強工事が行われるとともに、建物内部には発電機跡の遺構表示が行われた。曾木発電所遺構展望所(平成 19 年度)や宮人川ビオトープ(あつたらし村) (平成 22 年度)も相次いで整備された(図-2)。また宮人川ビオトープ(あつたらし村)にあわせ、曾木の滝公園内に旧曾木発電所の導水路跡を利用した、導水路散策路も整備された(2007(平成 19)年)。

曾木の滝周辺では、近年変化する旅行者ニーズへの対応や周辺の観光資源との連携を図り、活性化へとつなげることが課題となっている。曾木の滝分水路の完成を受けて、曾木の滝周辺活性化検討会が発足、2011(平成 23)年 3 月 1 日に検討準備会が開催された。検討会は、曾木の滝周辺一帯の継続的な利活用を進めるため、官民一体となり検討を行うというものである。メンバーは、伊佐市地域振興課を事務局とし、発電所遺構の保存・活用活動に関わってきたNPOやコミュニティ協議会、観光関係者、分水路の景観対策に関わってきた熊本大学大学院の小林一郎教授、及び筆者がアドバイザーを務めた(表-1)。筆者らは、曾木の滝周辺の過ごし方の提案や、ウォーキングイベントについての提案を行った。

3. 試行的ウォーキングイベントの企画・実施

本研究に先立ち 2012(平成 23)年 12 月、地元住民を対象として、地域資源を実際に体験できる試行的ウォーキングイベントを実施しアンケート調査を行った。実施にあたっては、曾木の滝分水路の景観検討に携わった筆者の研究室(熊本大学景観デザイン研究室)の企画をもとに、曾木の滝周辺活性化検討会にて開催を決定し、イベントの準備や運営は検討会関係者が行った。

2011 年 12 月 10 日に曾木の滝周辺における地域資源を実際に歩いて体験してもらうために、「曾木はっけんウォーキング」と銘打ったウォーキングイベントを開催した。イベント概要を表-2に示す。参加者 94 名、運営事務局であるNPOを中心に、当日スタッフとして熊本大学、九州工業大学の学生・教員合わせて 25 名と、伊佐市役所地域振興課や地元建設会社に加え、昼食の調理には羽月西コミュニティ協議会に協力を得るなど多くの地

表-2 試行的ウォーキングイベントの概要

開催日時	2011年12月10日（土）9:00~14:00	
参加費	1000円（小学生以上高校生以下500円）	
主催者	NPO法人バイオマスワークあったらし会	
申込者	一般：95名 ガイド養成講座：26名	計121名
参加者	一般：68名 ガイド養成講座：26名	計94名
当日スタッフ	NPO法人バイオマスワークあったらし会／林建設／羽月西コミュニティ協議会（昼食準備）／伊佐市地域振興課／熊本大学・九州工業大学／川内川河川事務所／I S A R T／ほか検討会メンバー	
協力	南日本新聞伊佐市局／伊佐市産業活性化協議会	

域住民が参加した。

ウォーキングコースには、同年3月に完成した曾木の滝分水路の初の一般公開や11月に開通したばかりの新曾木大橋も組み込み、既存の地域資源を含め11の「ポイント」を設定した。まず、あったらし村（宮人川ビオトープ）を出発し、①発電所導水路跡②新曾木大橋③分水路④取水口跡⑤観音淵⑥曾木の滝⑦強兵衛の力石⑧導水路跡散策路⑨ヘッドタンク跡⑩散策路⑪あったらし村でゴールとなる。また、昼食には、曾木の滝周辺地域で収穫・生成された伊佐米、黒豚や野菜を使ったおにぎりと豚汁がふるまわれた。

イベント成果を受けて、NPOが2012(平成24)年に第2回曾木はっけんウォーキングの開催を決定した。毎年実施している鶴田ダム湖遊覧船が、鶴田ダム再開発事業の影響で実施できないことが大きな理由であった。また曾木の滝では、もみじ祭りの時期以外の目玉となるイベントが無いことに対する問題意識もあった。

4.住民による社会資本の試用：住民主催のウォーキングイベントの企画・実施支援

試行的ウォーキングイベントの成功を受け、NPOを中心として曾木の滝周辺の社会資本を巡る第2回曾木はっけんウォーキングが開催された。地元では、試行的ウォーキングイベントを基礎に企画を膨らませるとともに、複数団体の協力のもと開催された。

第2回の主催者は試行的ウォーキングイベントを主催したNPOに加え、第1回に当日スタッフとして協力したNPO法人水と地球が加わり、2団体での主催となった。食事提供は引き続き羽月西コミュニティ協議会が担当した。また試行的ウォーキングイベントでは参加者であった観光ボランティアが、主催者側の要請によりスタッフとして参加することとなった。スタッフとして参加する市民団体は試行的イベントよりも増えており、後の地域づくりにとっても見逃すべきではない傾向である(写真-2)。

当日の参加者は、179名であった。参加者属性(①性別、②年代、③居住地)は以下のとおりである。

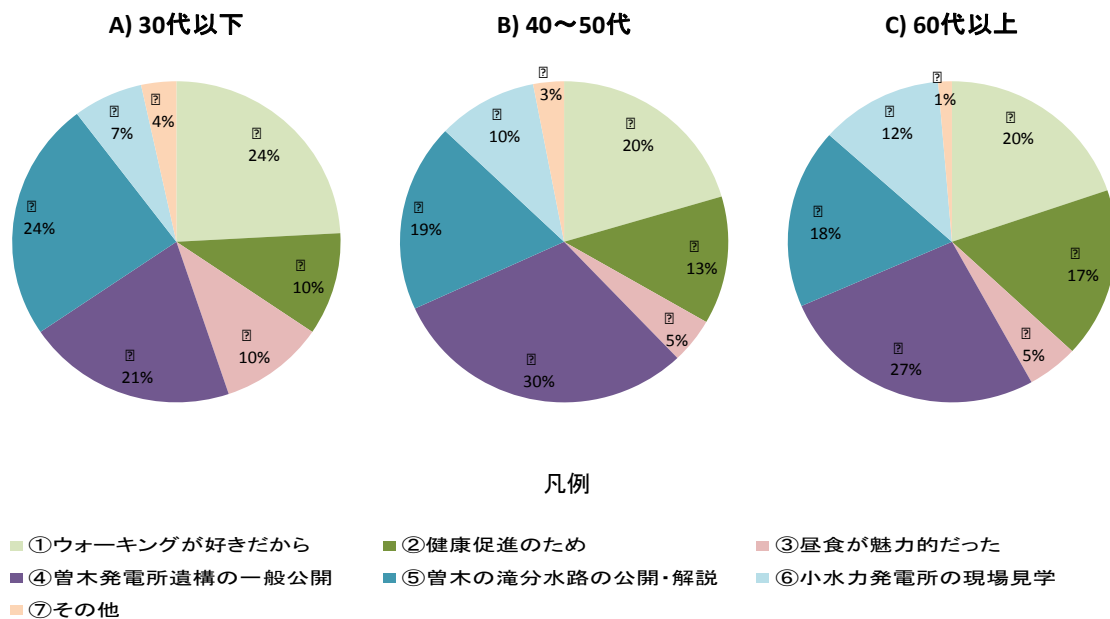


図-13 年代別の参加動機

参加動機について、A)30代以下(16名)、B)40~50代(57名)、C)60代以上(103名)に分け、グラフに示す(図-13)。

A)30代以下、B)40~50代、C)60代ともに、①ウォーキングが好きだから、②健康促進のため、が3~4割を占め大きな参加動機となっている。年代が上がるにつれ、②健康促進のため、の割合が増加しており、健康志向が強くなっていることが分かる。曾木の滝周辺の社会資本の公開や解説、見学は、いずれの世代においても半数を超える参加動機となっている。中でも、④曾木発電所遺構の一般公開、⑤曾木の滝分水路の公開・解説は特に強い関心が見て取れる。またいずれの世代においても、⑥小水力発電所の現場見学は1割前後となっており、市民の興味・関心を惹くには魅力の創出やアピールが、今後の課題としてあげられる。

5. 複数の社会資本連携の波及効果の考察と展望

本研究ではウォーキングイベントを実施することにより、個別に存在する複数の社会資本の連携と、個々に活動する複数の地域住民の活動の連携という2つの連携を意図的に創出した(図-14)。

曾木の滝周辺の社会資本は、いずれも本来の機能は観光に供するものではない。しかし空間的な結びつきを提示することで、地域内外の人々が訪れる潜在的な魅力を有しているといえる。ウォーキングや健康促進は、イベント参加の大きな動機ではあるが、そのような過ごし方をどこで行うか、という場所の選択において、何らかの目玉の存在が重要であ

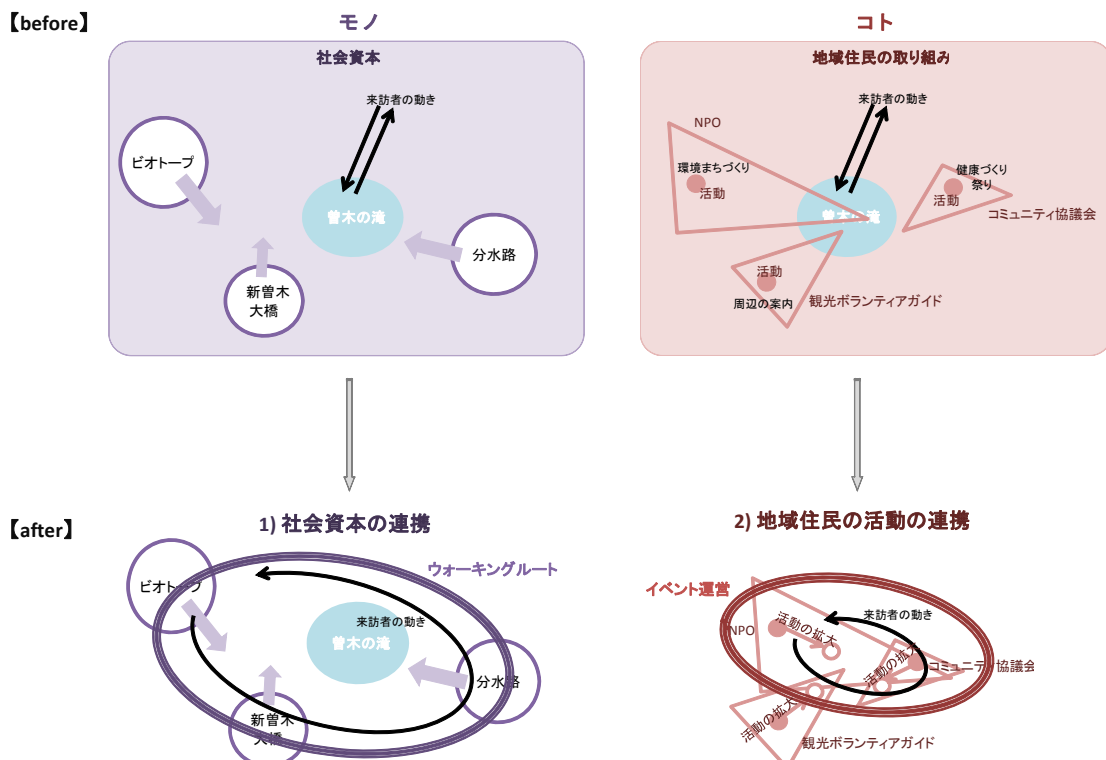


図-14 ウォーキングイベントによる2つの連携

ったと思われる。その目玉として有効なのが、景観的なインパクトや、施設としても印象的な社会資本であったと考えられる。また曾木の滝周辺では、そうした社会資本が徒歩圏内に集積したことから、地の利を活かし、複数の社会資本を連携させることができた。これにより、目立ちにくい場所の魅力が相対比較として、来訪者に印象付けられたといえる。

曾木の滝周辺で活動する団体は複数あり、それぞれに活動目的や活動内容、活動場所が少しずつ異なる。個々の活動の充実を少し広げ、地域住民の連携で補完しあうことで、曾木の滝という観光地が、地域住民にとってはこれまでと異なる交流の場となっている。さらに来訪者にとっては、空間として、体験として、曾木の魅力が伝わると考えられる。社会資本と地域住民の活動という2つの連携は、当該地域を「1度は訪れてみたい場所」ではなく、「何度も(戻って)来たくなる居心地の良い場所」へと導く効果が期待される。

6. おわりに

本研究の成果は、以下の通りである。

- ① 3章では、本研究に先立ち実施した試行的ウォーキングイベントについて説明するとともに、イベントにおいて抽出した住民意見の分析を行った。この取り組みが、住民主催のウォーキングイベント実施という、地域づくりの次の展開につながったことを述べた。
- ② 4章では、第2回曾木はっけんウォーキングの成果をふまえ、社会資本を地域の魅力

的な空間づくりに活かすための手がかりや課題を述べた。

- ③ 5章では、2回実施したウォーキングイベント成果をふまえ、社会資本の連携と地域住民の活動の連携という2つの活動の連携について考察した。